

田中晃二と デザイン

インタビュー（後編）



さまざまな経験を重ねてきた
田中晃二が語る、
デザイナーとしてやるべきこと。

パリで培ったのは、 「ひと」のつながり

青木 田中さんはしばらくパリにある「A Z P a r i s」で活動されていましたが、そもそもパリにA Zグループの支局を設立したきっかけは何だったのですか？

田中 コンセントの現社長の藪内さんが、パリに支局を創ろうと言い出したんだけど、それは、ビー・エヌ・エヌ新社とフィルムアート社の出版社2社が、A Zグループに入ったことが大きくて

ね。ビー・エヌ・エヌ新社はずっとフランクフルトのブックフェア

にブースを出していて、ヨーロッパとのつながりが結構強かったんだ。ヨーロッパの本をディストリビューターを通して輸入したり、その逆があったりして。当時は出版を事業のメインに考えてたから、ヨーロッパに拠点があるといういろいろ便利だろうと「A Z P a r i s」を立ち上げた。A Zグループの海外事業構想の一環でもあったけどね。

青木 拠点があった方が動きやすいですね。

晴天の逗子のカフェで。



もうパリしか考えられなかった

田中 うん。それで、どこにしようかといった時に、もうパリしか考えられなかった。ブックフェアって、フランクフルト以外にロンドンでもやってたりして、ロンドンの方がいいかもしれないって、みんなうっすらと思ってたんだけど、でもやっぱりパリだろうと。それは地理的にヨーロッパ



白い窓がある建物の3階がパリ支局。

の中心にあるってことと、「パリ支局」といった方が「お洒落」って感じが。

青木 確かに、お洒落ですね。

田中 営業的な効果を考えるとね。金融だったらロンドンかもしれないけれども、文化だったらパリかなということ。それとやっぱり「集合デン」の初代社長の稲葉さんがパリに住んでいるということが大きかったかな。私は当時から独り者だったんで、「田中さん行ってきたよ」ということで単身赴任することになったわけ。



支局の中。部屋は明るいですが陽は射さないで、無理してでも散歩に出たとのこと。

青木 それは何年のお話ですか。

田中 2009年だよ。社長業を藪内さんに引き継いで、AZホールディングスの副会長になった頃。足かけ2年くらいパリにいたよ。

青木 パリはどうでしたか。

田中 もう大変（苦笑）。最初はパリの郊外にある稲葉さんの家に下宿して。で、オフィスを探すのに、稲葉さんと一緒に15、6件くらい不動産物件を見てね。パリの不動産というのは、見るのが結構大変で。パリってなんでもすぐ「ランデブー」って言って、予約を取らないと何事も始められないの。病院に行くのだってランデブー、緊急以外はね。

青木 へー。

田中 でね、物件を見てまわるんだけど、行ってみると、屋根裏部屋の狭いとこだったり。パリの不動産って、ウェブで写真は見れたりするんだけど、全体の間取り図がないわけ。いろいろ見て、15件目ぐらいにサンミッシェルっていう交通至便なところにあるいい物件があったね、やっと決まった。でも契約を結ぶのがまた大変。不動産

契約を結ぶにはパリに銀行口座がないといけない。でもパリに銀行口座を開くにはパリに住んでないといけない。

青木 解けない問題ですね。

田中 そう、ニワトリと卵の関係だね。旅行者でも口座が開けるパリの銀行を探し出し、三菱東京UFJ銀行の助力もあって、なんとか大家さんと契約を結ぶことができたわけ。それまでに2カ月だよ。



稲葉さん夫妻と田中さん。モンパルナス近くのレストランで。星の付かない、下町の普通の食堂みたいなところが好きで、よく案内してもらったそう。

上／パリ市役所の1階が写真を中心にしたギャラリーになっている。 下／パリの南部、古い工場跡アトリエで行われた“アトリエ開放”の様子。



青木 聞いてるだけで、大変さが伝わってきました(笑)。具体的にはパリでどんなことをされてたんですか？

田中 ギャラリーによく行ってた。パリってアーティストが多いんだよ、石を投げるとアーティストに当たるぐらい(笑)。あそこは文化を売り物にしてるから、文化に対する予算がいっぱいあって、歴史的にアーティストが優遇されている。税制の優遇だったし、安くアトリエを借りられたり。パリの街は、建物はほとんど4、5階建てぐらいで、そんな高い建物はないんだけど、上の階には天窓があって、アトリエ仕様になってる。そこで春先と秋口ぐらいかな、アーティストたちが自分のアトリエを開放して、作品を

いっぱい並べて、軽くワインとかお茶とか出して、気に入った作品があったら売って。「こういう仕事をしたい社会に貢献してます」ということをアピールするの。それを見に行ったりとか。あと、だんだんネットワークができて、パリで活躍してる芸大卒の画家だったり、ガラス作家だったり、音楽家だったり、作曲家だったり。さらにその人たちとつながりのある人を紹介してもらったり。そうやって、いろんなアーティストの個展を見に行ってたよ。

パリってアーティストが多いんだよ、
石を投げると当たるぐらい(笑)

青木 刺激的ですね、毎日。

田中 ほんとに自由なところからやましいと思う、パリは。何をやってもある程度みんなが文句を言わないというか無視するとうか（笑）。あたたかく見てくれるという土壌がある。

青木 ブックフェアはどうでした？

田中 私は2回行ったんだけど、ヨーロッパも出版不況なの。それでもね、大手の出版社はもちろん、ほんとに小さな一人で作っているようなところだったり、活版印刷を回して詩集を作っているような出版社もブースに作品を出しているわけ。そういう細々となんだけれども、個性の強い印刷物を作っている人のパワーがすごいなと感じたね。職人的な人たちがいっぱいいて。けども日本と同じで、出版に携わっている人たちってやっぱり高齢化していて、あまり若い人がいないんだ、これが（笑）。

青木 不人気なんですかね？

田中 出版社をやっている人もおじいさんだったりして、だんだん伝統芸能っぽくなっていくのかなと思ったりするんだけど。でも盛

り上がってはいるんだよ。不況と言いつつも、日本だと大手の出版社は結構給料がいいって言われているじゃない？ 一般的には。けどヨーロッパでは、稲葉さんに聞いた話なんだけれども、いろんな職業の中で出版社の給料というのは相対的に低い。平均かそれよりちょっと安いぐらいなんだって。好きで出版をやっているから給料が安くても平気でやってる。でね、そのブックフェアに来ている人たちの顔を見ると、日本で会う出版業界の人たちと印象が似てるの。ガラガラしてないの。穏やかな人たちが多いんだよね。

個性の強い印刷物を作っている人の
パワーがすごいなと感じたね



支局のあるサンミッシェルは学生街なので書店がたくさんある。

「もの」ではなくて「ひと」の交流で

青木 物腰やわらかな……。なんとなく草食なイメージはありますよね。

パリで築かれたいろんな方たちとのつながりを活かして、何かこれからやっていきたいことはありますか？

田中 パリで仲良くなった女性のジャズミュージシャンがいて、稲葉さんの友だちなんだけど。彼女が逗子のカフェでテナーサックスの演奏会をやるというので聴きに行つて。それがなかなか良くて、今年の秋に来日する時に「am u」でもコンサートをやってもらふことにしました。少しずつそういうことができていけばいいかなど。「もの」ではなくて「ひと」の交流で、その人の芸を見せてもらふというね。

青木 「ひと」と「ひと」をつなげていくっていいですね！

手書き書体「コロール」は、 田中さんの愛情の証

青木 田中さんって、いろいろと面白いことをなさっていますよね。お若い頃、『an・an』の表紙を飾ったこともあるそうで。

田中 うん、ある（笑）。「女のおしゃれを刺激する男」っていう、男性向けのファッションの企画ですね。私以外にも、何人かがモデルをやったんだけど、たまた私が女性モデルと一緒に撮った写真が表紙になっちゃった！

青木 ダンディですね。カッコいい！ プロのモデルみたいです。

田中 女性モデルとの撮影は楽しかったよ（笑）。いい経験になりました。あと、面白いと言えば、私の手書き文字を写真植字の書体にしようという話も昔あったよ。お話だけでお断りしたんだけども。私が書く字はみんなから「コロール」って呼ばれててね。「コ

ロリ」（田中さんの愛称）が書く字だから。

青木 ああ、だから「コロール」と呼ばれているのですか。前編（7月号）でもお話に出ていた「コロリカーブ」に続いて「コロール」と、いろいろあるんですね。その「コロール」という手書き文字は、こういうところで使われたのですか？



イケてる「コロリ」さん。

※ダーマト：カメラマンや編集者が写真の指示などに使ったりする色鉛筆。ワックスが多めで、鉛筆削りいらずの紙巻き。



田中 例えば、雑誌の表紙で、「何かここを注目させたい」という時、書体や色を変えても埋もれてしまうような場合に使う。そうするとね、手書きの字だと要するに破綻をきたすわけだから、そこが目立つの。ただ、やりすぎるとちよつといやらしくなるから、どのコピーを「コロール」にするかを決めるのは難しいんだけど。『クロワッサン』の編集長がこのやり方につてくれたんで、時々使ってたんだ。

青木 『クロワッサン』のロゴも手書き文字なので相性が良いですよね、とても。この「コロール」は何で書かれてたんですか？

田中 これですよ。私の大好きなダーマト（笑）。

青木 本当だ！ 言われてみればダーマトの質感ですね。どんな紙に書くんですか？

田中 なるべくザラツとした感じがいい。わら半紙みたいなのが一番いいかな。最近は紙の品質が良くなつて、ザラ紙を探すのが大変だけどね。

青木 なるほど。紙によっては、ベタツとなつちやいそうですしね。

手書きにしようって。
社員に読んでもらうためにね



90年代初め、集合デン時代の社内報。手書きだとついつい読んでしまう。左の赤い色鉛筆がダーマト。

田中 あと、集合デンやアレフ・ゼロの社内報にも、「コロール」を使ってたんだよ。

青木 ああ、懐かしい！ こういう手書きの社内報って、読みたくなりますよね。

田中 そこが狙いなの、実は。当時はパソコンじゃなくて、ワープロソフトでやってたよね、コピー取って。でもそれだと普通の書類みたいで面白くないから、手書きにしようって。社員に読んでもらうためにね。

青木 社内報の文章も田中さんが？

田中 もちろんですよ、私が書いて。で、これはコツがあつてね。いきなりは書けないから、原稿用紙の裏とかに、鉛筆でマス目に合わせてラインや行間が揃うように書く。書いたらコピーを取って、ペーッと貼って版下を作ってたね。

青木 こだわっていらっしゃる。

田中 こだわりますよ、デザインーだから（笑）。ああ、思い出すと、小学生の頃に学級委員をやつて、学級新聞を作ってたんだよ、ガリ版だね。あ、ガリ版って知ってる？

青木 知ってますけど、実物は見たことがないです。

田中 やスリみたいなものの上にロウを引いた原紙を置いて、鉄筆でカキカキキッと書くわけ。それを謄写版に貼り付けて、上からインクのついたローラーでビューツとやると、書いたとこだけインクが出るという。

青木 孔版印刷のハシリのような感じですよ。

田中 そう、孔版印刷は謄写版やシルクスクリーンのことだよ。あと、これもそう、昔のアレフ・ゼロの人事評価年間スケジュール。時間軸に会議の日程を入れて。目標も書いてある。これを役員会やAD会議で管理者に配った。

青木 いいですね。ほのぼのします。

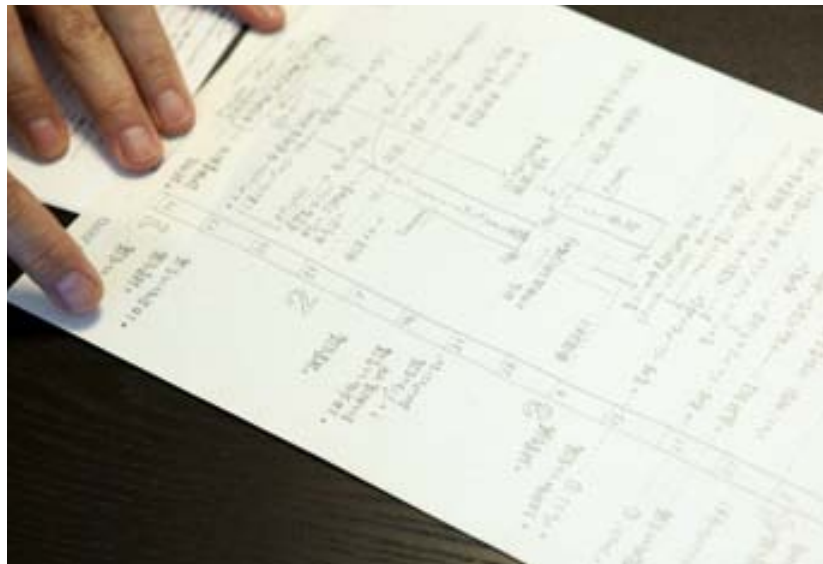
田中 役員会の議事録もちろん私の手書きで。そういう意味ではパソコンに遅れた人なの（苦笑）。私が「そろそろパソコンで書類を作ろうか？」って言っても、「コロリさんの手書きの方がいいよ」ってみんな言うから、つつい。だからワープロなんて覚える間もなく、手書きからいきなりパソコンだからね。大変だったよ、50歳ぐらいになってから勉強して（笑）。

青木 「コロール」を写真植字の書体にしようというお話があったとのことですが、なぜお断りになったのですか？

田中 手書き文字は手書きのアドリブ感がいいんだ、という考えがあったからね。

青木 確かに。ちなみに田中さんの好きな書体ってありますか？

田中 あるよ！ 写植の「YSEM」って書体が大好きでね、読売新聞の新聞特太明朝体のことなんだけど。普通の書体だと、平仮名を漢字と同じ級数にすると、「あ」とか「の」とか、平仮名の方が大きく見えて漢字が負けちゃうんだけど、「YSEM」は平仮名が小さめだからバランスがいいんだよ。『クロワッサン』の見出し書体イメージを「YSEM」にしようと、初代ADだった稲葉さんと決めてね。こればかり使ってたから、「YSEM」じゃないとなんか気持ちが悪くなるって。



人事評価の資料まで手書きで、きちんとデザインされている。

写植の「YSEM」って書体が大好きでね

雑誌は

「生活のガイドブック」

青木 長い間、『クロワッサン』のデザインをされてきた田中さんにあえておうかがいしたいのですが、田中さんにとって「雑誌」はどのような存在ですか？

田中 そうだね。「生活のガイドブック」みたいなものだ、私は。

青木 生活のガイドブック？

田中 生活を楽しむためのガイド、というふうに私は感じてい

る。一度しかない人生だから、生

活も仕事も楽しくやった方が暮ら

しが面白くなるからね。そういう

気持ちでずっと雑誌のデザインを

やってきたよ。徹夜ばかりだった

けど、楽しむ気持ちがあった

から、全然つらくはなかった

(笑)。幸せなことに、私はその仕

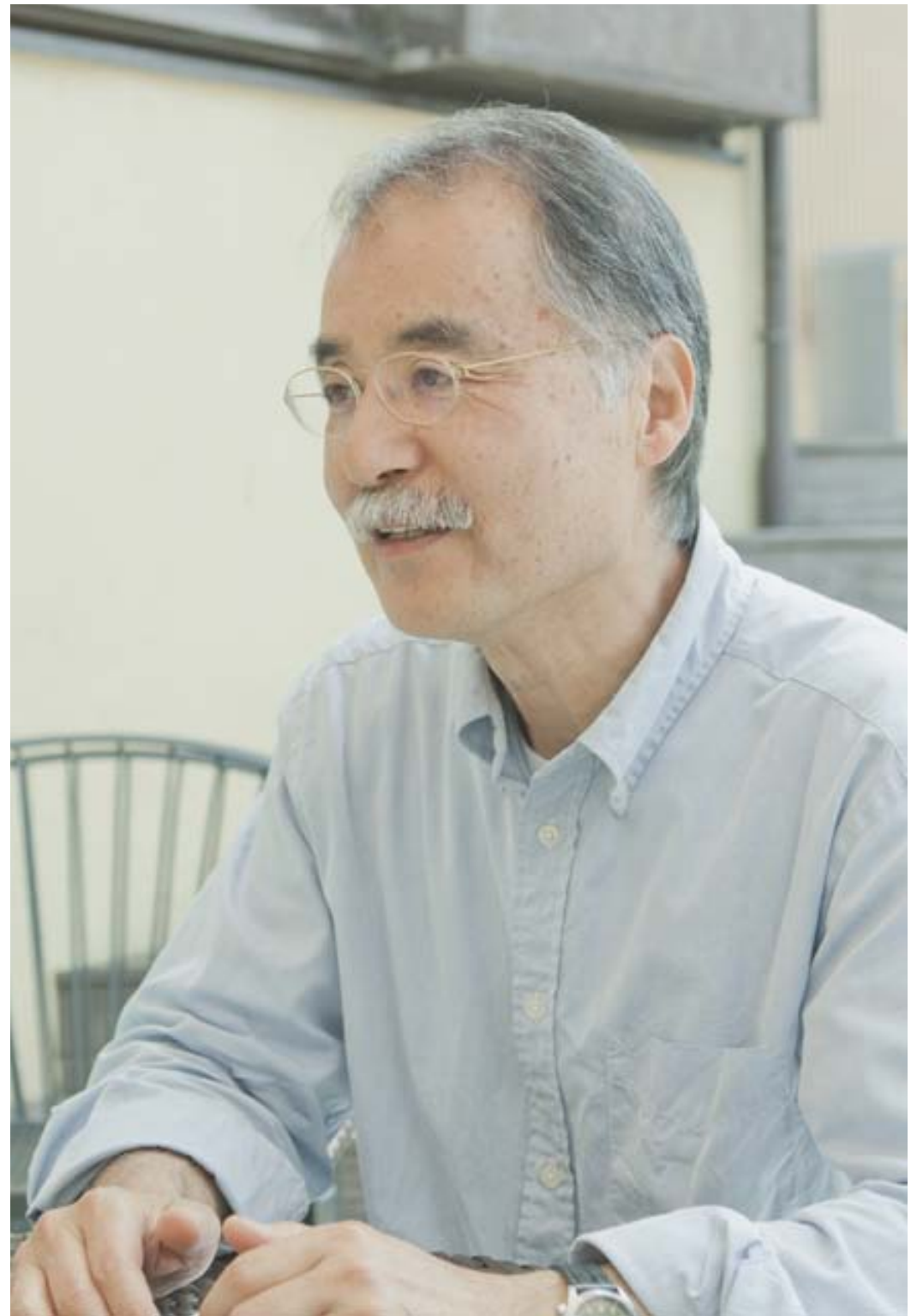
事と趣味の境界線あたりでずっと

仕事ができたとからね。楽しんで

作っているものは、それを読む人

もきっと楽しいに違いないだろう

な、というふうに考えてきた。



青木 売れる、売れないということとを考えるのももちろん大事ですが、『クロワッサン』的な楽しさをカタチにするというのが、田中さんのお仕事だったということですね。

田中 ああ、そうかもしれない。『クロワッサン』は女性誌だけれども、私は男にしてはわりと女の人が興味をもつようなことが大好きだったから、すごく入りやすかった。『クロワッサン』で扱うテーマは全部興味があったし。仕事だからやるというんじゃないで。そういう意味でもいい媒体にめぐり会えた、偶然だったんだだけ。

仕事だからやるというんじゃないで

青木 単に誌面をデザインするというのではなくて、その雑誌がもつ世界観をカタチにするというところが、アートディレクターの重要な役目なのでしょうね。
話はちよつと変わりますが、これからのエディトリアルデザインがどうなっていくのかということについて、何かヒントをいただきたいなど。今、出版不況と言われてはいますが、雑誌って残りますよね？

田中 私は残ると思いますよ。

青木 どんな残り方をするんですかね？ 種類が減っていくとか。

田中 ピークだった頃、20年ぐら
い前は、女性誌だったらこれと
か、男性誌でこれとか、バイクの
雑誌でこれとか、部数の巨大な雑
誌がいくつかあって。その外側
に、ちょっと視点の違う部数の少
ない雑誌が複数ある、みたいな感
じだった。そういう、部数の多い
メジャー雑誌という位置づけが、
今後あり得なくなるんじゃないか
なという気はする。つまり、そこ
そこの部数の雑誌が肩を並べ合う
ような。

青木 30万部の雑誌が1誌じゃな
くて、5万部のものが6誌みたい
な。

田中 そうそう、そんな感じ。当
時は雑誌が売れてたから、全体に
ね。今はメディアも増えて、読者
も細分化されて、「私はこれしか
読まない」というふうな。ある意
味では作りやすくなるのかも、と
いう気はする。





青木 読者層が、さらに明確になっていると。

田中 総合一般誌ではなく、同人誌的なノリの雑誌になっていくんじゃないだろうかっていう。

青木 確かに、デザイナーがその部分を汲み取ってデザインしていくと、デザインの質が変わってくるような気がします。

田中 狙いが、そういう意味ではっきりしてくる。

青木 1000部と1万部のデザインの違いって確かにあって、さらにウェブの場合は、下手したら100万部を超えるような

ユーザーに向けてのデザインをしているわけですね。読者とかユーザーの規模を意識してデザインを変えていくということは、ずっと考えていることなので、とても興味深いです。今はウェブや電子メディアがだんだんと雑誌や書籍の市場を危ぶめてるような気がします。今後、紙メディアはどうなっていくと感じられていますか？

田中 私はずっと健在だと、わりと楽観的に見てる。紙で確認して手元に置きたい欲求というのは、なかなか人間から消えないと思うからね。

青木 「読む」こととは別の欲求があるということでしょうか。



手元に置きたい欲求というのは、消えないと思うから

田中 そう、「もの」として残しておきたいというね。もちろん、こういう性格の媒体かで、手元に置いておきたいか、そうじゃないかっていうのは変わると思うけど。たとえば、私の場合、音楽の楽しみはCDやレコードのジャケットを見るところから始まって。ただタイトルだけで、ビジュアルが何もないまま、新しい曲を聴きたくないというのがあるのね。それは、もしかしたら音楽のジャンルなんかも影響するのかもしれないけど。私はジャズとかクラシックがわりと好きで、何度も聴き返したいのね。そういう曲だと、ジャケットのビジュアルの記憶と、音楽を聴いた記憶とをセットにしておきたいというのがある。でも、ちょっと流行って、またいつ流行るかわからないような曲だったら、「もの」が増えるのがいやな人にとっては、デジタルなダウンロードだけで十分なのかもしれないし。

青木 そうすると、紙メディアも、取っておきたいものと、そうじゃないものが……。

田中 情報として知ったらもうおしまいというものと、情緒的なテキストというかコンテンツとして取っておきたいというものと。た

ビジュアルの記憶と、
音楽を聴いた記憶とを
セットにしておきたい

たとえば、情報は新聞と同じで。今日の新聞は「新聞」だけど、明日になると「新聞紙」、1カ月経つと「古新聞」と、どうやら変わるらしいんですよ、名前が。どんどん紙の表面にあるものがなくなつて、紙そのものになっていくということですね。

青木 情報を吸収したら、あとはただの器だと。

田中 そう、いらなくなったものになっちゃうわけ。

青木 田中さんのお話で面白いなと思ったのは、見開きでどこに何があったかということを知りたくて記憶していたり、音楽をジャケットと一緒に記憶してるというところ、視覚表現が体験としてすごく大事なんだみたいな。

田中 大事だと思うね。視覚だけでなく触覚や匂いなども。

青木 ああ、五感なんですね！

お話を聞いてて思ったんですけど、たとえば、「この映画と言えんこのシーン」というような、ほんの2、3秒の映像が多くの人の印象に残ってたりするじゃないですか？ 映画を通してみると、あっという間に流れていくシーンが、広告などで静止画として切り取られることで、すごく印象の強いものになっているわけで。静止画でちゃんと残すということに、すごい価値があるはずなんじゃないかって。人間の記憶って、ダイナミックに動くものよりは、固定したイメージを、脳の中に上手く格納するようなくみになってるんじゃないかなと。

デザイナーという立場で、読むこと、見ることに對して、感覚的になんとなく共通認識があるところを、もっと詰めていくというのが、今後のエディトリアルデザインになるような気がします。ウェブのデザインでも、そういうところを深掘りしていくような時代になるんじゃないかと。



視覚だけでなく
触覚や匂いなども

田中 ウェブも、スクロールしてずっと下に下流れるのと、次のページをめくっていくのと二通りあるじゃない？ やっぱページで完結した方が記憶に残りやすいんだと思うのね、非連続的な方が。でも、記憶に残す方がいいのかどうかはまた別問題ですけど。

青木 またまた難しい話を（笑）。

田中 たとえば、むかし学校の歴史の試験で「5つの事件を時系列で並べよ」といった時に、教科書のあのページがこうなっていたからこの事件が先でと、教科書のレイアウトを思い出しながらやりとりしてね。他にも理科の教科書でビジュアルがメインのものは、記憶にすごく残っていたり。反対に、小説などのテキストがメインのものは、そういう記憶のしかたはできない。ストーリー全体としてしかな。それで、全体のストーリーの中で、ある部分の、自分にすごく引かったところは、すごくテキストが多い気がしてるんだけど、後で読み返すと意外にサラッと書かれてあったりするの。さっきの映画のシーンと同じ話だね。

青木 それをコントロールしてい



く技術だったり、考え方のしくみというのが今後出てきますかね？

田中 それは、一つには、前に話したゲシタルトの認知心理学とか、統計学的なこととつながってくるんじゃないかと。ビジュアル的にこう押さえればこういう効果がある、みたいな。

青木 デザインによってどれくらいそのページに滞在できるかどうかみたいなのが、具体的に数字がとれるようになってくると、もっとそこが進歩していくような気がします。

記憶に残りやすいんだと思うのね、
非連続的な方が



田中 でもね、そういった理詰め
でデザインするってことばかりに
頼るのも、いかなものかってい
うのもあるよね。

青木 まあ確かに。感覚的に気
なるものは気になるっていう。逆
の話なんですけど、読みやすい文
字組みって記憶に残らないんで
すって。

田中 ああ、そうなの？

青木 読みやすい文字組みとい
うのは、見やすいから、脳がそこ
に対してストレスを感じないんで、
記憶しないらしいんです。

田中 ノイズを入れないとダメっ
てことか。

青木 はい。だから読みにくいも
のを、マニアックな、知りたい人
が読むというのが一番記憶に残る
ということが、実験結果として出
てきているんです。まあ、単純に
読みにくいと、読みたい人以外の
人には読んでももらえないという
ネックがあるんで、積極的にやる
のは難しいですけど。

田中 でも一番なのは、「知りた
い」という、読む人の欲求度で。
10級、字間ベタ、行間ベタで、タ
テ組かヨコ組かわかんなくてもな
んとか読んじやうっていうのは、
エネルギーあるよね。

青木 その、エネルギーをかけて
読む時が、一番記憶に残るらしい
です。逆説的ですけどね。

一番なのは、
「知りたい」という、
読む人の欲求度で

「自分の仕事はこれだ」って
決めない方がいい

青木 今までのお話もふまえてお聞きしたいのですが、デザイナーはどうあるべきでしょうか？

田中 「自分の仕事はこれだ」って決めない方がいい。

青木 あー、なるほど。

田中 デザインって、カタチを作るということから、カタチのない、たとえばマネジメントとかプロデュースとか、そういったことまで含んでるんだけど。ただ、やっぱりデザイナーは、カタチに対する美意識がないとできない仕事だから、美意識が強い人は最後まで全て自分で線をひきたかったり、カタチや色を決めたいというのがあると思う。私、若い頃からすると、そういう気持ちはもう消えていて。たとえば、本屋で雑誌なんかを立ち読みしても、デザインがどうこうなんていう視点は全くない。言ってみれば、雑誌はある種の情報なわけだから、デザインの表現が上手くいって、いってないは別として、自分がほしがってたものかどうか、というあたりでしか最近は見なくなって。だから、「もう自分の仕事はこれだ！」って狭めると、結構困ったことになってしまいうんじゃないかな。

青木 絞っていくと、出口がなくなりますよね。

田中 そう、間口は広い方がいい。ただ、一度絞り込んで徹底することを経験してからだけだね。

青木 なるほど。そうですね、何かを極めないと。

田中 極めて、自分なりにもうやったという達成感をもったら、後は、他にもこういうのがあるに違いない、というふうに視野を広げていくべきだと思う。たとえば、自分はデザイナーである、と決めつけちゃうと、じゃあ「言葉を書くのはデザイナーじゃないから」となる。別にデザイナーがキャッチコピーを考えてもいいはずなんだよね。細分化していった中にどんどん入っていったら、僕はこれじゃなくて、これでもなくて、これなんだと言っちゃうと、どんどん自分がつらくなっている。そういう状態に陥っちゃう人ってやっぱりいたりするから。

青木 たとえばデザイナーだったら、どのあたりに目を向けていくべきだと思いますか？

田中 どのあたりというのはどういうこと？

青木 たとえば、デザインを絞っていたとして、次に目を向ける部分というのは、編集的な部分に目を向けるべきなのかとか。

田中 ああ、そういうことね。一口に編集と言ってもいろんな作業があるから、その中でどこを決めるのは難しいけど、たとえば私はパリに行った時からブログを始めたんですよ。

青木 はい、拝見してます。

なるほど。

一度何かを極めないと





田中 でね、最近は原稿を書いた

り、写真を撮ったりすることの方が面白い。うまい下手とか、そういうのとはまた別にね。デザインは二の次。あえて言うならデザインなんてでもいいよっていう気持ち（笑）。デザイナーだったら自分でちゃんとデザインしろよ、みたいなところもあるかもしれないけども、取材して、面白い写真が撮れて、テキストが上手くいったら、あとは好きにしてくださいって（笑）。今、『dacapo』（マガジンハウスのウェブマガジン）の連載コラムって、そういうふう

田中 それは長いこと編集者としてあつてたからかも。あと、初代社長の稲葉さんは、会社をやめた後で、デザインも少しはしたかもしれないけど、取材をして、写真を撮って、時々原稿も書く。それでお金をもらう仕事をしてるんです。だから本も結構いっぱい出してるのね。私は、稲葉さんから、「パリに行ったって仕事はできるんだ」とか、「デザインやらなくたって、写真を撮ったり原稿を書いて暮らしていけるんだ」とか、そういう生き方みたいなところで、すごく影響を受けたかもしれない。デザインの技術よりも。

青木 もうデザイナーとは思えない、文章書きの方だなと思ってます、田中さんは（笑）。

青木 変わってくるということですよ。突き詰めていって、何をやってでもいいって。

生き方みたいなところで、
すごく影響を受けたかもしれない



楽しむことが、続ける原動力だから

田中 うん。言いたいことは、デザイン領域を自分で狭めないってこと。自分が、一度どこかにしっかり立たないと何も見えなかったりするわけだけでも、その後はゆるく、何でもやってみることが大切。で、何をやってもいいんだけど、その仕事がいっぱい自分で面白いて思えないとつまらないよね。

なるからね。趣味か仕事かという曖昧なあたりで楽しくお金がもらえれば、もう一番幸せなんだと私は思うけど。

青木 理想的ですよね。

田中 私はそう思う。私自身がそういう心もちで、ずっと仕事をしてきたというのもあるけどね。

青木 何かを突き詰めたら、後は自分が面白いと思えるものを探すことが大切ということ？

青木 絶対大事なんですネ、その方が。

田中 そう、そう。面白いことというのはたぶん誰だっていくつかもってるはずで、それを上手く仕事にしちゃえ、と。仕事と趣味の境界線みたいところでやっているのがたぶん一番楽しい。趣味に寄り過ぎると、もう仕事じゃなく

田中 大事です。だから会社はこれからもそうあってほしいと思ってる。「デザイナーはこうだから」と決めつけて、「あなたの仕事はこうだから」と言っちゃったら、それは面白くないのでね。楽しむことが、続ける原動力だから。

青木 深いですね。では、仕事を
していく上で、必要な能力って何
だと思いますか？

田中 そうだなあ。私は実は、
アートディレクターになってから
おしゃべりになったんだよ。話さ
ないと仕事にならないから。それ
までほんとに無口な人で通ってた
んだけども。

青木 思ってるだけじゃなくて、
言葉にして出していないといけ
ないという？

田中 そう。稲葉さんは「口でデ
ザインするんだよ」とよく言っ
た。「手を使うな、口でデザイン
すればいい」ってね。

青木 しゃべれないとダメってこ
とですか？

田中 単なるおしゃべりではなく
てね、相手の本音を聞き出すため
のおしゃべりなんだけど。相手
が、ああしたい、こうしたい、こ

「手を使うな、口でデザインすればいい」ってね

ういうプランがある、とかいろい
ろ言うじゃない？ おしゃべりし
て聞いたことの中から大切なこと
を集めて、自分の中で一度編集し
なきゃならない。その上で、「あ
なたがやりたいことはこれで
しょ？」ってことを、見い出さな
いといけない。

青木 聞きながら、頭の中で編集
するということですね。

田中 そう。言葉として聞いたこ
とだけじゃなくて、その人の性格
とか、やってきたこととか、いろ
んな情報をもとに、こういうこと
をやりたいに違いない、と。そう
やって、いろいろラフとかを描い
てあげるとすごく喜ばれる。

青木 そうですよ。思っている
以上のところを何か考えてあげな
いと。「なんか言ってることとや
りたいことって実は違うんじゃない
の？」と感ずることがあったり
するので。

田中 うん。



頭の中って
理路整然としてる
わけじゃないし

青木 これだとそうならないし、とか。人って、ちよつと矛盾したことをしゃべってることとかありますよね（笑）。

田中 そういうものなんだよね、話す時は。でも、頭の中って理路整然としてるわけじゃないし、とっ散らかってる状態だから。

青木 それを整理する能力も、デザイナーには必要ということなんです。

田中 うん、しゃべることと聞く能力ね。聞く力も大事だと思う。そういうのなかったっけ？ コンセントに。

青木 会社でよく言われていることだと思うんです。「行間をちゃんと読みなさい」とか。「お客さんの本当のニーズって、言葉の奥にある」という話はよくされていて。お客さんに対してそれを徹底しなさいというのは、入社してからかなりしっかり教育されるので、今のお話の、田中さんの教えはずっと残っていて、受け継がれていますね。

青木 最後に、コンセントやA Zグループのスタッフに向けて、メッセージをお願いできますか？

田中 自分で創業に関わった会社で定年退職を迎えるという、客観的に見ると夢のような仕事人生を送ることができました。それが可能だったのは、いいスタッフに恵まれて一緒に仕事できたから。創業以来40年の間には、集合デんとヘルベチカが合併してアレフ・ゼロに社名を変えたり、ビー・エヌ・エヌ新社とフィルムアート社が参画する際にA Zホールディングスを創ったり、昨年は新コンセントが誕生したりと、会社の組織を大きく変えてきました。会社の器や環境だけでなく、ビジョンフォーラムや人事制度などのソフト面もバージョンアップを重ねてきました。

小さな変更からドラスチックな大転換まで、変わることが好きな会社でした、ほんと。でも変化を恐れなかったことで、40年続いてきたとも言える。

恵比寿は仕事するのにとてもいい環境ですね、定年退職するのが残念なくらい。会社も仕事も続けるということは、それ自体で大切なこと。そのために、これからも毎日楽しんで仕事してください。

青木 今日は貴重なお話を聞かせていただいて、ありがとうございます。そして、40年以上にもわたり、長い間ほんとお疲れさまでした！ 田中さんが会社に入められた思いだったり、これまで築き上げられてきたことを大切に受け継いでいきたいと、あらためて思いました。

変化を恐れなかったことで、
40年続いてきた